

乳児期から成人するまで

ジーン・ウォーカー・マクファーレン

これは、乳児から成人するまでの三十年にわたる成長・発達に関する研究からわかったことの一部分についての報告である。この研究の指導者だったカリフォルニア大学（パークレイ）人間発達研究所の心理学の名誉教授並びに研究員であるマクファーレン女史が、学校の先生にとつて、有意義と思われる資料を提供された。「どんな年齢になっても……我々は自分の得た自尊心をさらに増し、自分のもてるものを最高度にひき出してくれるような人を好むものである」女史が研究から見出したことは、教師は単に教科についての知識をもつだけでなく、子どもの個性を十分知り評価でき、そして教えるにあたっては弾力性をもつべきであるということだった。

この論説は、ガイダンス・スタディ（Guidance Study）の名で知られている長期間にわたる成長に関する研究プロジェクトの要約をつくるようにという求めに応じて書かれたものである。ガイダンス・スタディは、一群の乳児を、彼らが十八歳になるまで、その児童期、青年期を通じて継続的に調べ、さらに彼らがおとなの仕事つまり自分の子どもを責任あるおとなへと育てあげるといふ仕事に直面する年齢である三十歳になった時に再び調べた研究である。我々の研究対象となった人々およびその家族との、この長期にわたる徹底した共同の仕事から明らかになったいくつかの

事柄について述べる前に、まずこの研究の目的と性質をざっと紹介しておく。

研究の目的

研究対象者は、ごく普通の人間のサンプルを得たかったので出生届の登録簿によって抽出された。この点で、他の多くのこの種の研究が問題行動を扱っているのと対照的である。研究の全体目標は、(1)正常な人間の身体、知的過程、人格の成長発達の事実を記述し、種々の発達の時期での個人内および個人間の成長発達の

変動を確証すること、(2)これらの見出された事実と、(1)生物学的事実(体格、性、健康、成熟の度合)との関係、(4)物理的、知的、社会的環境条件——家族、遊び友だち、学校友だち、先生、その他当人にとって重要な人々との人間関係を、それらの人々のパーソナリティーやそれらの人々が与える影響を含めて——との関係を調べることに、(3)ある人々は自分の可能性を十分に実現しているのに対し、ある人々はそうできないでいる。またある人々は成熟し揺ぎないパーソナリティーを発達させているのに、他の人々はかたくなで神経症的に未熟で非効果的な行動パターンにしがみついている。さらにまたある人々はストレス下で新たな力を得るが、他の人々は闘いをあきらめ支離滅裂になる。こういった差異をもたらすのに決定的に関与するのはどんな事実の組み合わせなのかを明らかにすること、(4)我々が研究で用いたパーソナリティーや知的能力の評価の道具が、短期的および長期的にみてもどの程度発達予測ができるかと信頼してよいかをみることである。

研究の手續

このように短い論説では用いた方法の詳細を述べることはできないが、上述のことからもわかるように、生物学的側面、環境的側面、行動的側面、家族関係と広範にわたる測定を繰り返し組織的に行なわねばならなかった。レントゲン、身体計測、知能テスト、プロジェクトイブ・テストの他、親、きょうだい、子ども自

身、臨床心理家や医師など専門的面接者などとの面接記録がとられた。学級内でのソシオメトリー、毎年の学業成績も採られた。

見出されたこと

我々の研究でわかったことの中から、あまり専門的にわたらずに、幼稚園から中学校までの子どもを扱う先生に関係あると思われるものを拾い出してみよう。まず、我々の用いたいくつかの発達領域での評価の道具がどのくらい将来の予測力をもつのかをみてみよう。予測の程度は、長期にわたって、身長などの身体計測的なものが最もよく、次いで知能テスト、最もわるいのはパーソナリティー・テストとなっている。集団のメンバーが、各年齢を通じてその集団内で、どの程度同一の位置を保つかを示す指標となる年齢間の相関係数は、身長では三歳と十八歳との間では〇・七、知能テストでは約〇・四となっている。パーソナリティー測度については、三年間隔の年齢間相関でも〇・四に達するものは僅かであった。また、知能テストの成績は、年齢が増すに従って年齢間の相関が大になる(この結果は、ベイリイとソクタグの研究結果でも明らかにしている)、すなわち、年齢が増すにつれて知能テストの成績は安定してくる。三年間隔での相関をみると、三歳と六歳の三年間隔では〇・五五、四歳と七歳では〇・五九、五歳と八歳、……、八歳と十一歳の各三年間隔では順次〇・七〇、〇・七六、〇・七九、〇・八五、そして九歳と十二歳では身

長での三歳と六歳の相関と等しくなっている。これは、身長の測度（センチメートル）が知能指数という測度やパーソナリティーの測度よりすっきりとしたものであることによるといっただけでなく、身長が発達が、知能やパーソナリティー発達よりも早い時期に起こるといふことによる。我々の研究対象者についてみると、身長が、各人の成熟時の高さの半分に達するのは女子では平均生後二十か月、男子では二十六か月である。これに対して知的能力やいわゆるパーソナリティー特徴といわれる永続的な適応パターン——ただし素質的に規定される氣質を除いて——は、この年齢ではまだ成人のもつものの何分の一というごくわずかしが開花していない。

知能テスト成績の変動は、個人内の知能指数の変化をみた方がその意味がよりはっきりするだろう。六歳から十八歳までの間に行なわれた八回の知能テストでは十五パーセントのものがIQ十以内の変動を、五十八パーセント——約五分の三——がIQ十五以上の変動を、三分の一がIQ二十以上、十分の一がIQ三十以上、二十分の一がIQ五十以上の変動を示している。このことからわかるように、この八回のテストでの一年平均の変動は四分の三のものについてはIQ十以下ではあるが、一回のテストには、ことにそれが幼少の頃に行なわれた場合には、それほど信頼をおけないのである。

生育史とテストを受けた時の生活環境とを詳しく調べてみると、知能指数は、次のようなものと関係があることがわかった。すなわち、生得的な能力、子どもの家庭のもつ知的な興味と刺激、言語的環境、知能テストでおさめられる成績に対する態度、テストに対する態度、自分の知的能力についての自信の程度、ストレスの下でかえって機能が昂揚するかそれとも消沈してしまふかの習性、対人関係が円滑にいつているか否かということ、テスト自体および他の一般生活の中で著しい情緒問題があるか否かということ、テストの性質等々の複合したものに関係することが明らかになったのである。集団としてみれば、知能テスト成績と教育的達成度（訳注、学歴）の間に決定的な正の相関がある。しかし、この研究でわかったおどろくべきことのひとつは、知能テストと学業成績とが悪かった人——何人かは高等学校までそうだったが——で、現在は、創造的な知的能力を必要とする仕事についているものかなりあるということである。このような例は、以下の予測の正しくなかった例という項で紹介されるであろう。

人はどんなふうにならぬか

この長期の研究を通じて我々は、人が成熟し、自分自身を受け入れ安定した状態でいられ、自分の潜在能力を十分發揮できるよくなる唯一の道は、全生涯にわたって次第に成熟していく経験を通してであるという結論に到達せざるを得なかった。もちろん

問題をどのようになしかたで解決するか、どのよう学習するか、どのようになしかたで困難に対処するかということ、それぞれの個人の年齢、潜在能力、体格、気質、健康などの要因により変わってくる。身体的側面についていえば、それらは、たとえば、乳幼児期、青年期などの成長速度の速い時期にいかどうかということによって変わる。同様に学習内容も、その環境の中にいる人すなわち両親、先生、きょうだい、学校友だちなどが許容的であるか、奨励的であるか、要求的であるか、賞めるか、罰するかなどによって異なる。もちろん、訓練、教育をする人の影響は、その人の生来の性質と相まって訓練、教育の方法によって変わってくる。子どもの能力に過重な圧力や子どもの性質に反するような訓練、教育方法がもたらす結果は、子どもによってさまざまなものとなる。ある子どもは、一層奮起努力しようとするが、ある子どもは不安になり打ち砕け、事態に対し誤った対応の仕方をして、またある子どもは防衛的になって何もできずにおり、またある子どもは非行に走り、更にまたある子どもは、不適切で不健康ないろいろな試みをしてみるというふうである。

正しかった予測と正しくなかった予測

個々人が遭遇する学習すべき課題は多様であり、異なった個体にいろいろ異なった発達の時期に首尾一貫性を欠いた圧力が加わっているのに、なぜ、多くの人が首尾一貫性をもった成人になる

のか、我々にはまだ確かなところはわからない。我々は、成長しつつある時代に子ども自身や、両親や教師がぶつかっていた不安やジレンマを非常によく知っていたので、ほぼ十二年後に成人した彼らを見た時には、劇的ともいえるおどろきに打たれたのであった。約半数のものは、いくつかの異なった理論的立場のどれから予測されたよりもっと安定し、有効に生活している成人となっていた。約二割は予測されたより悪く、予測どおりのものは、三分の一以下であった。

我々の予測が正しかったのは、幼少期にいろいろな面で過度に統制的なしつけをうけ、束縛の中にとじこめられたような人々についてである。これらの人々はその防衛パターンが非常に堅固になっており、それが一面では彼らを保護してはきたが反面多くの学習の機会を閉ざし、経験も乏しくなり、貝殻にとじこまったような状態になっている人々である。彼らは、多くの場合、貝殻のようにとざされた性格を一層強めるような同じ性格の配偶者を選んでいった。予測が正しかったもう一つの場合は、精神発達遅滞児である。第三の場合は、家族の子どもに対する取扱いが一貫性を欠く——ある時は溺愛的であり、ある時は厳しく子どもの自信を失わせるような取扱いをするものであった。これらの人々は、安定し統合された行動パターンを習得するのに三十歳までかかった。強迫的に酒を飲まずにはいられない人々の大半は、このグル

ープに属する人々である。

次に予測が誤っていたもの(約二割)についてみてみよう。彼らは、十八歳までの記録では、運動や芸術その他の才能の面で、あるいは家族関係、社会関係がうまくいっていることからみて、有望な将来を約束しているように思われたが、成人してからの評価では、潜在能力を十分に發揮できていないとか、不満で緊張した生活をしているとかのために、予測されたよりも遙かに浅薄な人格しか持つに至らなかったものである。これらの例の大部分は、青少年期に、非常に成功していた運動選手だったものや、美貌で社会的生活できわだって成功していた少女だったものである。これらの人々は、成人してからはもはや青少年期に仲間や先生や両親から与えられていた名声が得られなくなってしまった。彼らはもはや自分が成功していると思うことはできなくなったのである。彼らは地味に努力する前にあまりに若くして異常な成功を経験してしまった。そして、彼らのエネルギーの不当に多くの部分が自分自身のイメージを保持するために使われた。しかし成人してからの人生はそれほど甘いものではなかった。青少年時代までのある年代での成功は、成人してからの成功をはかる測度とはならないのだ。自分の力で獲得したのではない過去の成功は重荷ともなり得る。しかし彼らに時間を与えよう。彼らはもともと才能を持っているのだから、この中から何人かの人は現在の不満

状態から脱け出すであろう。しかしな何人かは過去の成功のことを思い、どうしてそれが去っていったのかをいぶかり、良き若き日々にあこがれながら人生を送るのではないかと懸念される。

予測よりよくなった例

人格形成にとって、一貫して不利な条件をたくさん背負っているという事実に基づいて、偏った不完全なおとになるだろうと予想したが、どの予測よりもよくなった例——ことに一割ほどのものは予測よりはるかによく成熟し有効に活動する人間、あるいは非常に創造的な人間になっていた——についてみよう。これらの人々の数はたいへん多い(全体の約半分)。これらの人々は、過去と比べて自分の現在に驚きの念をもっていて、その生活のあらましを喜んで我々に話してくれた。

幼児期、青少年期の行動パターンに影響する種々の要因について論ずることはさておき、とにかくこの人生の初期の状態と成人してからの状態を描写してみよう。これら一割の人々の中で二人は、長い間「きまり」に対する反抗にそのエネルギーの大部分を費やしてきた。知能指数は高かったが、学業成績は及落の境目だった。学校での時間のうちの多くの部分を「校長室で過ごす」ありきまだった。だが、やがて公立学校をひとり(女子)は十六歳のとき、いまひとり(男子)は十五歳のとき退校させられた。現在はいふたりとも人生の複雑さを見とめ受け入れ、人間に対する同情とユ

—モアを持ち、賢明で安定した理解ある親になっている。女性の方は、専門的訓練を受けた後、自分の子どもが学校に行っている時間を利用して、かなりの時間と力を身体障害児のためにつくしている。男性の方は、自分で事業をし、家族のために十分な収入を得、また家庭では父親と母親の二役（子どもの母親がいないので）をつとめている。ふたりとも自分たちの人生をふりかえって、自分たちがしたような、こんな困難な、エネルギーの浪費のよくなやり方よりもっと容易な成長の道筋があるに違いない、と
いていた。

いまひとりの例は、三十歳になってから我々の予測を裏切るように変わったもので、彼自身も高等学校卒業までの自分を「忘れものみぞっかす」だったといていた。彼の知能指数は、十八歳までは百近辺だった。小学校で三度も落第し、高等学校を卒業したのは二十一歳のときで、大学進学は推せんはもらえなかった。彼は自分の育った土地を離れて、高等学校での不足の埋め合わせをし、現在では非常に有能な建築家となり、「自分の子どもを通して正常な子どもの時期を生活している」ということだった。彼は、自分の地域社会での活動家であり、「人生は興奮を覚えさせる素晴らしいものであり、満足だ」といっている。明らかにこの例では、十八歳までの知能テストで測られた知能指数は、学業成績とは一致したが、彼の真の能力の測度ではなかったのだ。

いま一例、成績は及落の境目で、社会的には孤立しており自己

中心的で不幸な少年だったのが、現在大きな建設会社の支配人になっている例があげられる。彼の仕事上での主要な満足は、部下に徐々に責任をかけ、より難しい仕事を与えていって、彼らが自信と能力を増していくのを見ることであつた。

さらにいまひとつ、身体の大きい臆病な早熟の少女だった人の例をあげよう。彼女は、肥満型であり、母親にとつて自分は失望であつたに違いないという恥の気持ちに悩み、母親から認めてもらいたいためにB平均の成績をとろうとただひたすら勉強する。平凡でおもしろみのない少女だった。生きる価値を見失って抑うつ状態に陥つたこともあつた。その後大学三年の時、自分の学んでいることに非常に興味を覚えるようになり（母親を喜ばすべく単によい成績をとるということだけでなく）、さらに大学院に進み、大学で教えるようになった。そして今では子どもを持ち自分で育てている。彼女は陽気で知的なおもしろみのある男性——彼に大学院時代に出会つた——と結婚した彼女は理解と温かみのある、生きることに情熱をもつた人間になっている。「人生は、今では、非常に良いものだと思います。——けれども気持ちのよい幸福な人生に到達するまでには長い、長い、時間がかかりました」ということだった。

誤つた予測をひき起こした原因

我々の予測はなぜ間違つたのだろうか。個々の生育史を見直し

てみると、誤った予測に導いたと思われるいくつかの要因を認めることができる。

(1) まず我々は、問題行動や、病的側面に重きを置き過ぎて、成熟によってできてくる要因を軽視しすぎた。大部分の人格理論が病理学的立場から出ているのでこういった側面に過敏になり、人間はおのずから安定化し成熟していくことを見過ごしていた。

このことについては資料はあったのだが、これらの要因を重視せず目前に横たわっていた問題行動にのみ気をとられ過ぎていた。

(2) 我々は、子ども時代に習得され習慣化されたよい行動様式や態度が、永続的であることを過大評価しすぎた。これらの行動様式は、それがどんなに習慣的になっていようと、状況が変化して、新しい事態では目標に達するのにはや有効な対処の手段方法ではないということになれば、大部分の場合、放棄されるか修正されるかするようだ。このような再学習を試みている期間には、だれでも不安であり、やってみたり、やめてみたり、突拍子もないことをしてみたりという行動があらわれた。この、既にもっているパターンが新しい欲求事態に対して不適切であり、しかし他方新しいパターンが定着しない時期は、青年自身にもその親にもはつきりとみとめられた。

(3) 我々が学んだいまひとつのことは、成熟に伴う苦悩と混乱をくぐり抜けることなしに成熟する人はひとりとしていないということである。我々は、ひどく外傷経験と思われ、従って成熟をもた

らさけないというような経験できえもそれが成熟につながることを観察した。成人した我々の研究対象者はこのような経験の故に彼らが欲することと欲しないこととの間に調和を見出すことを発見したのである。これらの経験は、やがて明確な方向に向かって行動の方向を変えることに役立ち、これにより成熟をもたらす経験となった。

(4) さらにいまひとつわかったことは、我々の研究対象となった人々の多くは、結婚するまではエリクソンのいう「自己同一性」を得ることができなかったことである。彼らは結婚して親となつてはじめて、他人への責任を通じて自分に価値があることを認めることができる役割を与えられる（むりやりに与えられる場合もあるが）——このようなことは青少年時代の専ら受けるだけ人間関係ではなかったものだった——

(5) 我々は、長い間続いたパターンが修正され変更されるとしても、それが全く正反対の性質のものに変わるとは考えていない。例えば、我々の研究対象者で過度に依存的な人の非常に多くが、養護的な愛情深いパターンに変わった。しかし、極度な過保護になったのではなかった。これは、それらの人々が、自分子どもの中に育みたいのは自信であり過依存性ではないことを知っていたからである。エネルギーで支配的な母親をもち、長い間過依存だった男の子の場合、我々の予測は、ちょうど母親のようなタイプの女性と結婚し、過依存のパターンを続けていくだろ

うということであった。ひとりふたりについてはこの予測は正しかったが、大部分の過依存の男の子だったものは、彼ら自身が支えとなり保護者となる誇り高き男性の役割を与えられるべく、自信を欠いた女性と結婚した。彼らは、このような自分を中心とするのではない位置に自分を変化させるという新しい状況の下で成功したのだった。警察官となった四人のうち三人までが、年上のできのよいきょうだいをもち、さらにそのうちのひとりには支配的な親をもっていて晩熟であったこと、また多数の社会的不適応の子もだったものが、あたかも補償的に社交技術の要るセールスマンとなったということも単なる偶然とは思えない。

(6)ある人々は「遅咲き」あるいは「固まりの遅いゼリー」のようである。これらの人々は長い時間かかって、また育った土地や家族から離れて、新しい環境で青、少年期の混乱と禁止から抜け出し、自分自身となるように自己解放をなすとげた。ある人々は人生初期には葛藤する欲求と思われたものを包みこんでしまうような仕事を得るか、あるいは遂に自分を打ちこめる有意義な仕事を得てはじめて自己を確立できたのだった。

個々の子どもの最もよいものをひき出すこと

あなた方は教師として直接子どもに影響を与えるのは、子どもの長い成長発達の期間から見ればほんの一部にすぎない百八十日の間だけである。しかし、我々の研究対象となった人々が三十歳

になったとき、そのすべてが先生を覚えており、また非常に多くの人は、先生のことを彼らの気持ちに尊重し、興味をかきたて、彼らのもてるものを最高に発揮できるようにしてくれた重要な人として覚えてるのは驚くべきことである。もちろんどんな年齢になっても人は自分の自尊心を増大してくれる人、自分のもてる最高のものを引き出してくれる人を好むものである。最近の流れとして、「もっとむずかしいことを教えよ」という、知育重視の耳ざわりな要求がきかれる。ここでは学習者である子どもは、興味、性格、内的モチベーションが個人個人みな異なっているのだという事実を余りにも簡単に無視している。教師に要求されることは、教科の知識だけでなく、子どもの個性を知り、それに価値を認め、それぞれの子どもが興味をもち、一生けんめい勉強するように仕向けるような柔軟性のある教え方ができることである。ここで私が、子どもを教えることに喜びをもつ先生方に促したいことは、「警鐘を打ちまわす口やかましい見物人（訳註、直接に教育にたずさわらず単に論評を加えたり、机上論から生まれた方針を論ずる人）」に押し流されないようにして欲しいということである。もちろん、もしあなたが、この幼年期と呼ばれる個人個人の非常に豊富な多様性を認め、それに興味をもつに至れないならば、教師を職業とすることをやめるべきである。なぜなら、この豊かな多様性に教師は必ず出会うのだから。

（青山学院短期大学・伊部泰子訳）